

金子みすゞ 『琅玕集』におけるクリスティーナ・ロセッティ —— ‘Confluents’ と竹友藻風訳「會流」 ——

小澤 次郎

1 ‘Confluents’ と訳詩

本稿では、当論集前号（三十八号）掲載の拙稿（小澤 2012b: B17）をうけて、金子みすゞ（1903～1930）の『琅玕集』所収の「クリスティーナ・ロセッティ女史詩鈔」（金子 2005: 10-19）中の詩六編のうち、最初の詩編「いと低きところ」について、「二番目の詩編「會流」（＝會流）を検討する。この詩編は、金子みすゞが『琅玕集』に書きうつすにあたって直接依拠した竹友藻風（1891～1954）の『クリスティーナ・ロウゼッティ』の第二十章「宗教詩」において詩編「いと低きところ」について掲げられているものである。小澤の考えでは、これは内容の上からみてもっと注目されてしかなるべき作品であると思う。なお、詩編の表題となった「會流」という語彙は、現代における「合流」とほぼ同じ意味の言葉とみてよいだろう（新村 2008: 474／小学館 2001: 284）。

はじめにクリスティーナ・ジョージナ・ロセッティ Christina Georgia Rossetti (1830～1894) の英詩をみることにしたい。英詩は以下の通りである。

‘Confluents’

As rivers seek the sea,
Much more deep than they,
So my soul seeks thee
Far away:
As running rivers moan
On their course alone,
So I moan
Left alone.

As the delicate rose
To the sun's sweet strength
Doth herself unclose,
Breath and length;
So spreads my heart to thee
Unveiled utterly,

I to thee
Utterly.

As morning dew exhales
Sunwards pure and free,
So my spirit fails

After thee :
As dew leaves not a trace
On the green earth's face ;

I, no trace
On thy face.

Its goal the river knows,
Dewdrops find a way,
Sunlight cheers the rose

In her day :
Shall I, lone sorrow past,
Find thee at the last?

Sorrow past,
Thee at last?

竹友藻風(1924:108-109)が『クリステイナ・ロウゼツテイ』で引用した英詩の本文は、後で述べるように、実は第一スタンザ(第一連)のみである。そのことは藻風自身が本文のなかで記していて、当然、みずもそのことを理會していたに違いない。

藻風の引用したクリステイナ・ロセツテイの英詩には、現行におけるテキストと比較した際に、ひとつだけ大きな異同がみとめられる。現行のテキストでは第一スタンザの四行目はコロンの「:」になっているが、それに対して藻風の引用した本文ではセミコロンの「;」になっている。

る。今までのところ、クリステイナ・ロセツテイの自筆原稿は発見されていない。しかし結論から先にいえば、藻風の引用した本文のセミコロンは誤植と判断してよいだろう。根拠として、次の二点をあげることができる。すなわち、第一に、藻風も『クリステイナ・ロウゼツテイ』でその価値を高く認め、当時において最も信用されていたウィリアム・マイケル・ロセツティ William Michael Rossetti 校訂の『クリステイナ・ジョージナ・ロセツティ詩全集』The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti 所収のテキストの当該箇所がコロンのことになっていること。第二に、現在、最も信用のあるクランプ R. W. Crump 校訂の『クリステイナ・ロセツティ全詩集』The Complete Poems of Christina Rossetti 所収のテキストの当該箇所も、コロンのことになっていること。以上の二点である。

つぎに、クリステイナ・ロセツテイの英詩 'Confluents' の大意に言及する。以下に掲げる英詩の大意は、逐語訳でないが、なるべく意味を把握しやすいように、つぎのように配慮した。たとえば、大意ではそれぞれの連が英詩の各スタンザに対応するように一行あけて記したこと。加えて、英詩の各スタンザにおけるコロンのセミコロンの構成がわかりやすいように、大意では改行を行なったことである。

合流する河

さながら河が自分よりもっと深い海を求めて行くように、そのようにわたしの魂もはるか彼方あなたを求めて行く。

さながら流れる河がその道すがらひとり歎き悲しむように、そのようにわたしもひとり残されて歎き悲しむ。

さながらあえかな薔薇が甘く力強い陽射しに向かって、限なく縦横に自分の花弁をひらくように、そのようにわたしのころもあなたに向かってつつみ隠さず、あなたにすべてをひらく。

さながら朝露が陽に向かつて無垢なまま何物にも妨げられずに蒸発するように、そのようにわたしのころもあなたを慕って消える。さながら露は緑の大地の表面にわずかな痕跡も残さないように、わたしもあなたの顔の表面に跡を残さぬままに消える。

行き着く先を河は知っている、道を露の滴は見つけている、陽射しは薔薇を花ざかりのときに活気づける。

わたしは、孤独で悲しい思いが過去となり、最後にはあなたを見つめることができるだろうか。悲しい思いが過去となり、最後にはあなたを。

つぎに、竹友藻風(1924:109)の訳詩を掲げる。先に述べたように、英詩の第一スタンザにあたる箇所までしか藻風は翻訳をしていないため、当然のことながら、訳詩も第一連しかない。また、詩編の表題「會流」は、本来は引用箇所にないけれども、本文の解説に表記されているので、便宜上一緒に掲げた。

會流

かれらより底ふかき海を

河河のもとむることく、

わが靈は汝をもとむ

はるけくも。

ひとり行く路に、流るる

河水のうめけるごとく、

われはたうめく、

ただひとり。

この藻風の訳詩を書きうつした、金子みすゞ自筆の『琅玕集』の該当箇所の写真(平凡社2003:23)をみると、以下のような異同が少なからずみられることは注目してよいだろう。すなわち、①表題がなく、「二」と配列の番号のみであること。②二行目の平仮名「ごと」が漢字「如」であること。③三行目「靈」にルビがないこと。④三行目の平仮名「もとむ」の「も」の箇所に、漢字「求」を書こうとして訂正した形跡があること。⑤五行目の漢字「行」が平仮名「ゆ」であること。⑥八行目の平仮名「だ」が一の字点の表記「ゞ」であること、以上が主要な異同として指摘できる。

おそらく①の表題がない無題の理由としては、みすゞの依拠した『クリスティーナ・ロウゼッティ』の引用箇所に表題がつけられておらず、本文の解説のなかで表題が明らかにされていたことから生じたものと推定される。同様のことは「クリスティーナ・ロセッティ女史詩鈔」の三番目の詩編についてもいえる。ところで、①に加えて、②③⑥の異同を考慮に入れた場合、こうした本文異同からみて、みすゞは限られた短い時間のなかでロセッティの詩を書きうつしていたということがわかる。そして、この藻風の『クリスティーナ・ロウゼッティ』が英文学の専門書であったことを考慮に入れれば、おそらくみすゞは自分が勤めていた書店にあった書籍を仕事の合間に読んで書きうつしていたのではないだろうか。このように想像をめぐらしてみても、あなたがち見当はずれであるともいえない。むしろこうした制約があったにも拘らず、みすゞが自身の文学の創作にとって重要と看做したロセッティの詩を著作の中からの確に選択して書きうつしている事実が驚かされる。この問題に関しては、すでに拙稿(小澤2012a:145-149/小澤2012b:B2)で言及したので、そちらをご参照いただきたい。

ロセッティの英詩‘Confluents’の全文を訳したものととして、入江直祐の擬古文調による訳詩「落ち合ふ流れ」(1940:14-15)のあることが知られる。入江の訳詩は、以下の通りである。

落ち合ふ流れ

川よりさらに底深き

海をもとめる川のごと、

君をもとめる わが心

はるかにも。

川ひとすぢのゆくまゝに

川波ひとり嘆くごと、

われも嘆くか

ただひとり。

匂へる薔薇の花^{はなびら}の

甘き陽^ひざしにさそはれて

背のび丈^{なな}のび 花^{はなびら}瓣^{はなびら}を

ひらくごと、

思^{おも}ひの文^なをひたすらに

隠^{かく}しもせずに見^みせまつる

ただ君にこそ

ひたすらに。

朝^{あした}の露^{つゆ}の 陽^ひをうけて

清^{きよ}くほがらに消^きゆるごと、

わが心^{こころ}さへ君^{きみ}を追^おひ

細^{こま}るなり、

緑^{きよ}の土^{つち}の面^{おも}ざしに

跡^{あと}を残^{のこ}さぬ露^{つゆ}のごと、

露^{つゆ}ほども 君^{きみ}

しのばずや。

流れる川は果^はを知り

露^{つゆ}はゆくべき道^{みち}を知り、

薔薇^{つばき}は陽光^{ひかり}に照^あらされて

よろこべど、

ひとりの愁^{うれ}ひ つきるとき

つひには君^{きみ}に逢^あふべきか、

愁^{うれ}ひもつきて

あ、つひに。

ロセッティの英詩「Confluents」の内容を検討してみよう。この詩編の構成は、大きくふたつの部分から成り立っていることがわかる。そのふたつの部分とは、前半部にあたる第一スタンザから第三スタンザまでの部分と、後半部にあたる第四スタンザのみの部分である。前半部では、第一スタンザの「海を求めて行く河」、第二スタンザの「太陽に向かつて花咲く薔薇」、第三スタンザの「陽射しをうけて消える朝露」という《三つの自然のモチーフ》から、自身の現在の生き方を内省して、そこに共通する《造化の意味》を闡明にする。ここで看過してはならないことがある。すなわち、神の創造した《自然》には、神の意思が《造化の意味》として表現されており、同じく神の創造物たる《人間》はその《造化の意味》を読み取ることができるし、また、読み取らなければならない。という宗教観^{しんこうくわん}がうかがえることである。ところが、後半部では一転して《三つの自然のモチーフ》と対照的な存在として、《自然》から疎外された《人間》の姿が描かれる。そこでは人間は《造化の意味》を読み取ることができないために、かえって《自然》に同調できない《孤独》^{こどく}を痛烈に意識せざるをえない、という逆説^{ぎゃくせつ}が提示される。

したがって、ロセッティの英詩「Confluents」においては、第一スタンザから第四スタンザはすべて揃ったうえで、本来鑑賞すべきものであることがわかる。にも拘らず、藻風は第一スタンザのみを取り上げてい

る。これはどういふことだろうか。

2 藻風の理會と背景

その理由を推定するうえで、竹友藻風がこのロセッティの英詩‘*Confuents*’を、いったいどのように解釈していたのか、そのあたりから考察してゆく必要がある。このロセッティの英詩を引用する前の箇所、藻風(1924:108)はじぎのように述べる。

然しクリスティーナには是等十七世紀の詩人にも由来しない、ひとすぢの清い流が通つてゐる。その脈は際立つて宗教的である宗教詩よりも、寧ろ一層普遍的な敘情詩に境を接する種類のものの中に多い。この種類の詩となると、そこにAnglican Churchの信仰は影を絶ち、基督も神の名さへ消え失せて、残つてゐるものは唯ひとつの聲、*De Quincey*の所謂‘*Flight from a solitary to the Solitary*’、『孤獨なるものより』「孤獨なる者」への飛翔』を見るばかりである。次に掲げる詩はその適例であらう。

とある。文中にある「是等十七世紀の詩人」とは、この引用文のまえにあげられた、十七世紀におけるMetaphysical Schoolに属する宗教詩人、そのなかでも特にロセッティの英詩に由縁のある者としてあげられたジョージ・ハーバートGeorge Herbert(1591-1633)やヘンリー・ヴォーンHenry Vaughan(1621-1693)をむす。この箇所の引用をみると、このロセッティ英詩は、宗教詩でありながら、それにとどまらない普遍的な抒情詩であり、かつ、みずからの孤獨を掘り下げることで到達することの可能な普遍的な孤獨への飛躍を表現した希有な作品の典型的な例として、藻風がみていたことがわかる。

ところが、さらに重要なことには、藻風(1924:110-111)がこの英詩の引用の後の箇所、つぎのような指摘を行なっていることである。そ

の内容は以下の三つの点に要約できるだろう。すなわち、第一に、ダンテの『神曲』地獄界第五歌「および」天堂界第三歌との関連を指摘していること。第二に、『聖書』詩篇第四十二篇との関連を指摘していること。第三に、浄土宗教(浄土教)との関連に言及していること、この三点である。

最初に、第一のダンテとの関連から検討する。ダンテ・アリギエリDante Alighieri(1265-1321)の『神曲*La Commedia*』(現行の書名として流布する*La Divina Commedia*の*Divina*は、後世の付加であるため、本稿では除く)からの引用された箇所は二箇所である。つまり、①「地獄界(地獄篇)第五歌」(*Inferno* 5: 97-99)にある、リミニRiminiのフランチェスカFrancescaが生まれ故郷ラベンナを回想して語る場面の一節と、②「天堂界(天国篇)第三歌」(*Paradiso* 3: 88-89)にある、ドナーティDonatiのピツカルダPiccardaがみずからの在り様と神の恩寵を語る場面の一節である。藻風は①②ともにイタリア語の原文をかかかて、訳を付している。①の訳は、

わが生れしは海のほとり、

ポオの大河從者つれて

平和をもとめ流れ落つ。

である。「從者をつれる」というのはポオ河に流れ込んでくる、つまり会流する支流のことをたとえていった表現である。そして、②の訳は、

聖意みせねこそわれらの平和、

そは神の、また「天」の成す

ものみなの流れ入る海。

である。藻風が①②を並べて記したことは偶然ではない。ここで注目されることは、別々の文脈で語られて全く無関係のようにみえる①と②

は、実は、神の摂理をしめす一連のつながりによって結びついていることである。寿岳文章（2003：40-41）によれば、②とは、神の聖意のうち人間との平和があることを示すことばであり、神の聖意が創り、また神の聖意を享けて自然が造る一切のものが帰入する大海に、おのおのの安息する場所を象徴させているとする。これは「煉獄篇第十四歌」（*Purgatorio* 14：34-36）にみられる自然における水の循環の叙述を踏まえる。海から太陽熱で水蒸気となった水が、雨となって降り注ぐ河川が合流して海にもどっていく——その自然の摂理に、神が一切のものに安息する場を与えようとする意思をみとめるのである。それゆえ寿岳によれば、①も単なる生まれ故郷の描写ではなく、フランチェスカの言葉には、「神との平和を冀いながら、永久にその得られぬ悲しみが秘められている」という。炯眼こいねがだろう。この地獄、煉獄、天国をめぐる一連の連環する発想は、オックスフォード版のマルティネスとダーリングによる注釈（Martinez & Darling 1996：97）やプリンストン版のシングルトンによる注釈（Shingleton 1991：70）などにも言及されているので、この知識はおそらく藻風も共有していたものと推測される。ただし、今のところ藻風が直接何に拠ったかは不明である。

つづいて、第二の『聖書』詩篇第四十二篇」との関連の検討に移る。

藻風によれば、ロセッティの英詩『*Confluents*』を読んだときに第一に想起するのが、つぎの詩篇第四十二篇の有名な一節だという。

ああ、神よ、鹿の溪水たながはをしたひ喘ぐごとくわが靈魂たましひもなんちをしたひあへぐなり。

そこで、該当する箇所ของเกมズ欽定訳聖書（KJV 1998：662）の本文をみてみる。それは以下の通りである。

As the hart panteth after the water brooks, so panteth my soul after thee,
O God.

藻風の指摘するように、この聖書の表現がロセッティの英詩に深くかわっていることは間違いない。構文からみても、内容からみても、似ていることは明らかである。すなわち、構文では *As...so...* のように、そのように〜とあるように同じかたちがちがもちられる。加えて、内容でも *the water brooks*（細流、小川）と *the rivers*（河）と意味の似た言葉があり、また、『わたしの心（魂） my soul が《あなた》 thee を、《慕い喘ぐ》 pant after あるいは《求めて行く》 seek と似た表現となっている。

この同じ箇所をマソラ本文から翻訳したものはどうだろうか。つぎに松田伊作訳（2005：84）をあげる。

川床のほとりて
鹿があえぐように、
かくわが魂もあえぐ、
神よ、あなたに向かつて。

この同じ箇所は新共同訳でも「涸れた谷に鹿が水を求めるように／神よ、わたしの魂はあなたを求めよ。」（日本聖書協会 2013：旧約28）とあるように、まさに曠野を髣髴とさせる厳しい旧約聖書の世界である。渇いた大地の谷底にある地下に流れる水を求めるように、痛切に神を渴望する信仰心をしめすものであった。おそらく藻風がロセッティの訳詩において、「うめく」と訳したことも、この詩篇の内容を踏まえてのことと推定される。

しかし、ロセッティの英詩で、この詩篇第四十二篇と異なっている点のあることも看過してはならない。それは鹿が水を求めるのではなく、河が海を求めている点である。これはダンテの『神曲』における宗教観が、このロセッティの英詩において聖書の詩篇に劣らずに、重要な影響を及ぼしていることをしめしている。

つまり藻風にとって、ロセッティの英詩『*Confluents*』は、聖書の詩篇

第四十二篇とダンテの神曲との融合された宗教世界の顕現として把握されているといつてよい。とすれば、藻風がロセッティの英詩『Confluents』の最も重要なところとして、訳詩「會流」として第一連だけをとり上げて訳出したことも理合できる。ここで留意しておかなければならないことは、そうは言っても先述したようにこの英詩におけるロセッティの孤独の問題についても藻風は注目していることから、このことが決して第二連と第四連を軽視したことのあらわれではないことである。言い換えれば、藻風としてはこの英詩のエッセンスを第一連に収斂させてみていたものといえる。

3 海の浄土

最後に、第三の浄土宗教への言及の問題について検討する。竹友藻風がこのロセッティの英詩『Confluents』に浄土宗教（浄土教）をみていたことは注目されるべきことである。なぜなら、このことが金子みすゞに、ロセッティの英詩『Confluents』への興味を強くいだかせた主要な要因のひとつとして推定されるからである。ただ残念ながら、このロセッティの英詩『Confluents』と浄土教とがどのように関連するのか、藻風は何も述べてはいない。そこで、浄土教との関連をしめす根拠をみつける必要があるだろう。

親鸞「教行信証」行巻」末にある「正信念仏偈」(石田 2010: 111)の中に、つぎのような句があることが注目される。

凡聖逆誘齊しく回入すれば
衆水、海に入りて一味なるが如し

この句のおよその意味は《凡人も聖者も、五逆の罪を犯した者も誘法の罪を犯した者も、等しく回心すれば、多くの河の流れが海に入つてひとつになるようなものだ》ということであり、あらゆる衆生が差別なく

救われることを説く。すなわち、煩惱に苦しめられる愚かな者でも、煩惱を解脱した賢い者でも、それまでの罪業を悔いて回心すれば、差別なく同じように等しく救われる。たとえ仏教で大罪とされる五つの罪を犯した者でさえも、仏法の悪口を言つて仏教を信じない者でさえも、それまでの罪業を悔いて回心すればやはり差別なく同じように等しく救われる。そしてみな極楽に往生できるという(末木 2013: 166)。このさまざまな衆生の在り様を「衆水」(多くの河の流れ)にたとえ、差別なく同じように等しく極楽に往生することを「海に入りて一味なる」(海に入つてひとつになる)と表現する。この《多くの河も、海に流れ入つてひとつになるようなものだ》という比喻表現は、先ほど言及したダンテ『神曲』の叙述と、不思議なほどに自然描写でも宗教的な理念でも酷似する。

「正信念仏偈」が親鸞の思想を簡潔にまとめたものとして普及していることを考慮すれば、藻風はこの句を想起することで、浄土教との関連に言及したものとみて間違いない。

そして金子みすゞとの関連を考えた場合、生まれた仙崎が浄土宗や浄土真宗のさかんな土地柄であったこと、祖母が浄土真宗の熱心な信者であったこと、また、みすゞが小学生の頃、母や祖母が場所を提供して浄土真宗の勉強会を行ない、みすゞも母や祖母と一緒に聞いていたこと(矢崎 1983: 84)などから、今までみすゞが培ってきた浄土教の世界の視点(小澤 2011b: 62-63)を通して、ロセッティの英詩『Confluents』および藻風の訳詩「會流」に対しても着目したであろうことも容易にうかがえる。しかもこの詩は、すでに述べたように、自然のモチーフを述べた後に、自身の現在の生き方を内省するという謂わば《二項対立の構造》になっている。この《二項対立》も亦、みすゞの詩の構造を考える上で、重要な問題を孕むものである。この問題はすでに拙稿(小澤 2011a: 100)で検討した。こうした詩の構造にも、当然、みすゞは着目していたはずである。加えて、モチーフとしての海の象徴性も、みすゞにとって示唆に富むものであったに違いない。

以上が『琅玕集』における第二番目の訳詩「會流」をもっと注目されてしかるべき作品とする所以である。

【参考文献】

- 石田瑞麿 (2010) : 石田瑞麿編注『親鸞全集』新装版第一卷(春秋社)。
入江直祐 (1940) : 入江直祐訳『クリスチナ・ロゼッティ詩抄』(岩波文庫)。
小澤次郎 (2011a) : 小澤次郎「金子みすゞにみる詩の構造——二項対立を超えた莊嚴世界——」(詩と詩論の研究会編『金子みすゞ み仏の祈り』、勉誠出版)。
小澤次郎 (2011b) : 小澤次郎「特集金子みすゞと仏教／その生涯と独自の視点」、『大法輪』平成二十三年一〇月号、大法輪閣)。
小澤次郎 (2012a) : 小澤次郎「金子みすゞ『仏さまのお国』の問題——クリスティナ・ロゼッティ『宗教詩』への傾倒——」、『詩と詩論の研究会編『金子みすゞ 愛と願い』、勉誠出版)。
小澤次郎 (2012b) : 小澤次郎「金子みすゞ『琅玕集』におけるクリスティーナ・ロゼッティ『The Lowest Place』と竹友藻風訳「いと低きところ」——」(『北海道医療大学人間基礎科学論集』三十八号)。
金子みすゞ (2005) : 金子みすゞ編『童謡・小曲 琅玕集』上巻 (JULA 出版局)。
寿岳文章 (2003) : ダンテ・アリギエーリ著、寿岳文章訳注『神曲III 天国篇』(集英社)。
小学館 (2001) : 『日本国語大辞典』第二版、第三卷(小学館)。
新村出 (2008) : 新村出編『広辞苑』第六版(岩波書店)。
末木文美士 (2013) : 末木文美士『浄土思想論』(春秋社)。
竹友藻風 (1924) : 竹友藻風『クリスティイナ・ロウゼッティ』(研究社)。
日本聖書協会 (2013) : 『聖書 新共同訳』(日本聖書協会)。

平凡社 (2003) : 矢崎節夫監修「別冊太陽 生誕一〇〇年記念 金子みすゞ」(平凡社)。

松田伊作 (2005) : 松田伊作訳「詩篇」(旧訳聖書翻訳委員会訳『旧約聖書IV 諸書』、岩波書店)。

矢崎節夫 (1993) : 『童謡詩人金子みすゞの生涯』(JULA出版局)。

KJV (1998) : The Bible : Authorized King James Version with Apocrypha. Ed. by Robert Carroll and Stephan Prickett, Oxford UP, Oxford, UK.

Martinez & Durling (1996) : *The Divine Comedy of Dante Alighieri : vol. I. Inferno*. Ed. and tr. by Robert M. Durling, Intr. and Notes by Ronald L. Martinez and Robert M. Durling. Oxford UP, New York, USA.

Rossetti, Christina (1904) : *The Poetical Works of Christina Georgina Rossetti*. Ed. by William Michael Rossetti. Macmillan, London, UK.

Rossetti, Christina (2003) : *The Complete Poems of Christina Rossetti : A Variorum Edition*. Ed. by R. W. Cunpp. Louisiana State UP, Baton Rouge, USA.

Singleton (1991) : Dante Alighieri, *The Divine Comedy : Paradiso 2 : Commentary*. Tr. with a commentary, by Charles S. Singleton. Princeton UP, New Jersey, USA.

平成二十五年八月二十九日受理